
FAIRYTAIL ~氷の滅竜魔導師~ 改訂版

神雷鳳凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRYTALE～氷の滅竜魔導師～改訂版

【Zコード】

Z4669Z

【作者名】

神雷鳳凰

【あらすじ】

ある日トラックに轢かれそうになつた女の子を守り代わりに轢かれて死んでしまつた主人公、秋川 真琴は、まだ死ぬ運命ではなかつた真琴をミスで殺してしまつたらしい、そして神に転生のチャンスを貰つた真琴は、エックス・ブラックシアと名前を変えFAIRYTALEの世界へと足を進めるのであつた…

プロローグ？

俺の名前は秋川 真琴高校1年生のビートでもいる男子生徒だ、今は下校中、さて今日は帰つたら何をしようかな？

そう考へてみると田の前に交差点が見えてきた、見通しがよく、事故も少ないこの交差点は、車どおりが多く、今は帰宅ラッシュのためかいつもより車や、トラック、バイク、自転車、歩行者の通る数も多い、そして俺が田を別の方向に向けると轢かれそうな女の子が…って危ない！？

「間にあえええ！……！」

どういって飛び込むと女の子を歩道に突き飛ばした、しかし、俺に逃げる余地はなかつた…

ドシャツ

その音とともに俺の意識は暗転した

次に目を覚ますと俺は全体が白い部屋にいた
そう、窓も、天井もなく、壁があるかどうかもよくわからない、た

だいえるのは、足元に青い魔法陣、簡単に言うと周りに魔法語？みたいなものがあり、周りには雷がうずめているると俺はある考えに至った

俺は死んだのか

それが一番の考え方だつた

そして俺は仰向けの体制から立ち上がつたすると奥のほうから白いローブをまとい、後ろから白い羽が生えていて、リングが頭についている女性がいた俺はふとその人に話を聞くために移動した

「あのお、すいません」

「えつ！？まさかあなたが私がミスで殺してしまつた人？」

「ハツ！？」

この時俺は驚愕した、俺が死んだのはどうやら神様のミスらしいどうやらこの人が言うにはあの女の子は元々あそこで死ぬ運命だったのだが、俺が助けてしまつたために时空が歪み、運命が変わり俺が殺されたそうだ

「それで俺はどうすればいいんですか？」

「はい、実はあなたはまだ死ぬ運命ではなかつたので地獄にも、天国にも送れないでの、あなたには転生してもらわないといけないのです」

「どこにですか？」

俺はこの展開を知ってるぞ、この後大体元の世界というとできなくて、漫画やアニメ、ゲームの世界はOKとこう展開がテロップ的に決まってる

「はい、具体的には漫画やゲームの世界に転生できますよ」
「そうですか…」

実際そういうわれても困る、行きたいところがありすぎてすぐには選べない
どうしよう…… そういうえば、妖精の尻尾の世界だつたらいいかもな、
魔法を貰つて、原作キャラとかかわつてみんなと仲良くなりたいし
…… よしつ！一決またたぜ

「じゃあ、俺は妖精の尻尾の世界に行きたいです」
フェアリー・ティル

「分かりました、それで魔法は何がいいですか？」

「じゃあ、氷の滅竜魔法と、氷の滅神魔法、そして「コピー」魔法をください、それと失われた魔法のアーク系統と妖精の法律とテン・ロマンドメンツの剣型で」

「分かりました、ではあなたの転生後の世界で使う名前は？」

「エックス・ブラック・ギャラクシー……エックス・ブラックシア……エックス・ブラックシアでいきます」

「分かりました、ではそこに立つてください」

「はい」

「では私のことを念話で呼ぶときはキュリアと頭の中で念じてください」

「はい」

「では、この世界に宿りし、火・水・風・草・光・闇・氷・雷・鉄のフォースよここに集いこの者に新たな人生を歩ませよ！！」

そう神様が唱えると足元の青い魔法陣が蒼く光り俺は光の中に消えて行つた

第1話 氷の竜 エターナル

「ぱぶぱぶぱーふふ（どうしてこうなった）」

さて俺ことエックスは、いま森に一人で放置されています
多分理由としては捨てられたのだろう、魔法も一つも覚えていない
し何もすることがない…そう思つていると

バサツ バサツ ドスンツ

といつ音がした、何の音だろ？

『こいつは人間の子供か？それにしても人間とは愚かなものだ、な
ぜ子供を捨てるのか…まあ良い、この子供は我が連れて行こう』

ほう、これが滅竜魔導師の誕生するまでの経緯か？

まあとにかく今後はこの竜の言つとおりに暮らせばいいはずだ

『我にもやめじよがある、だからもういの別れだ』

「なんで？」

「どうか、やつへへへ年々月々日か

『我とは今日でお別れだ』

「ん？ どうしたの父ちゃん」

『ハックスよ』

「…分かつた」

さびしげ、いぐりなんでも

『その代わりと書ってはなんだが、この氷臨刀を下さる』

「ありがとう父さん」

『元気に生きる、ヒックス』

「うん…」

そう返事を返すと父さんは飛んで行った
満足そうな顔で…

第2話 天竜の子とヒドラスヒナ～ヒクシードの誕生

ただいま俺はウェンティとミストガンが初めてであった回想シーンで出ていた森にいます
それにもしても

「ここは暑いな」

そう熱帯地域だ、まあ確かに氷の滅竜魔導師ドラゴンスレイヤーだが、体内に氷の魔力を持つていてもやっぱり暑いのには変わりない

「それにしてもどこだらつ……誰だ……」

「君こそ誰だい？」

「俺はエックス、エックス・ブラックシア」

「僕はジョンラール、君はここでいつたい何してるので？」

「氷の竜エターナルを探している、この刀は形見だ」

「さうか、君も竜の子か、この子も竜の子だよ」

「……」

「無口だな」

「この子は引つ込み思案なようだね」

「やうなのが、よりしくな、えーっと」

「……ウーンティイ」

「ん？ そつかよろしくなウーンティイ」

「……うん」

なるほど、このあたりではモジモジラールとウーンティイは一緒に行動しているのか

「とこりで、エックスはどう行くつもりなんだい？」

「俺は妖精の尻尾フエアーティールに行くつもりだよ」

「やうか……じゃあおわか……何か来る……」

「……何が来るの？」

「俺がやる……《チャキッ》一人は離れて」

「あ、ああ」

「……うん」

そう言葉を交えると来たのはラクリマジロ、厄介な相手だがそこまで厄介ではない！！

「行くぞ……」

「グオオオオオオオオオオ」

相手の雄たけびと同時に奴は攻撃に転じた

「転がりか…ならば！」

そういうと俺は息を吸つて

「氷竜の……咆哮！..」

ズ「オオオオオオオオ
といふものすごい音を立て俺の魔法はラクリマジロに激突した
すると

「ゴオオオオオオオオ…『ドサリッ』」

ラクリマジロは鈍い音を立てて倒れた

「刀を使つまでもなかつたな『チヤキッ』」

そして俺はそういうふやくと刀を鞘にしました

s.i.d.e out

s.i.d.eウーンディ

最初はコワそうな人だつたけど
エックスさんかっこいいな
でも妖精の尻尾フエアリー・テイルに行くつて言つていたし
まあ旅の中でギルドに連れて行ってくれるつて言つてたし、入つた
ら、聞いてみよう

side out

side out

「じゃあ俺はそろそろ行くから

「ああ元氣でな

「またあえたらいいですね

「そうだね

そう話しあはその場を去つた

俺はウエンディとミストガソと別れた後、歩き続け、東の森にたどりついた

「もうすぐで フェアリー 妖精の尻尾テイル につくな

そつ」ココは東の森の中でも フェアリー 妖精の尻尾テイル に近い側もつすぐで着く

「さあもう夜になるし、そろそろ木に登つて寝るか…」

そつつぶやき、木に登るとエクシードの卵らしきものがあった

「これはエクシードの卵か？原作のハッピーの卵とは模様が違うし、しかももうすぐ生まれそうだ」

そう、その卵はもうひびが入つていてあと一時間ほどで生まれそうだ
そう思つてみると

ピキッ

とこ'の音がした

「ん?」の音はまさか!」

そう思つてみると卵が割れ猫が生まれた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4669z/>

FAIRYTAIL～氷の滅竜魔導師～改訂版

2011年12月16日19時52分発行